
アカシック

悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アカシック

【Nコード】

N3448L

【作者名】

悠

【あらすじ】

「運命に操られる。そんな理不尽をいつか人間が乗り越えられるように。はねのけられるように。まずは、僕が強くなると思うんです」

やがて少年は、世界を救う。やがて少年は、世界を脅かす敵となる。そして人は『強さ』を手に入れることができるのだろうか――？
「アルカナ」の悠が描く本格王道ファンタジー。ここに開幕！

第一部第一章「その名は……」（前書き）

本格ファンタジーですが主人公たちの名前は日本名です。異世界ファンタジーと言う括りに入ると思います。

まずは本作の雰囲気を感じていただければ幸いです。

第一部第一章「その名は……」

アカシック

第一部第一章「その名は……」

——オリジン王国北部、プラムの町。

そのギルドの扉が開き、カウベルを鳴らす。

それに気づいたマスターがそちらを見やると、そこにいたのは十にも満たないであろう少年と、少年に着き従うメイド姿の少女。

はて何をしに来たのだらうとマスターが首をかしげていると、少年は淀みのない足取りでカウンターの方へと近寄ってきた。

「ギルドに登録申請をしたいんですけど。僕と、この子。二人分」
そんなことを真顔で言う。

あり得ない話だ。まだ幼児と呼ばれてもおかしくない少年が、強大な力を持つ魔物との戦いや、危険な遺跡に潜ることになる冒険者稼業を始めようなどと。

呆れかえったマスターが阿呆な冗談を言っていないで帰れと追い返そうとしたところで、客の何人かが少年に気づき、笑い声を上げた。
「おいおい坊主！ おめえみたいなチビガキが、どうやって冒険者をやってくつもりだあ？ そこら辺の犬っころにも食い殺されそうなガキが！」

「従者付きってこたあ、どっかの貴族の坊ちゃんか？ やめとけやめとけ。お家に帰ってダンスのレッスンでも受けるこったな！」

ガッハツハと豪快に笑い飛ばす。それに少年は少々むっとして反

論する。

「それでも戦闘訓練は受けているよ。見たところおじさんたち、ギルドランクCくらいだね？ 多分、僕のほうが強いよ？」

「あん？」

ギルドランクは凶星だったのか、その言葉に力チンと来たらしい男が立ち上がって少年を睨む。普通の少年ならば萎縮してしまうものだが、少年は平然としていた。

……だが、考えてもみてほしい。ただの子供がひと目見ただけでギルドランクを見抜けるだろうか？ 答えは否である。

「マスター、どうすればギルド登録してもらえます？」

断固とした態度の少年。言っても引きそうにないと長年の勘で察知したマスターは溜息を吐き、なんとかこの少年を諦めさせる方法として、ある荒療治を選んだ。

「む……そうだな。ガイラさん！」

マスターの呼びかけに、ギルドの奥に座っていた中年の男がスツと立ち上がり、カウンターに歩み寄ってきた。

「坊主。このガイラさんはこのギルドで一番の実力者だ。Bランクで、近々Aランクへの昇進も決まっている。この人と戦えたら、まあ登録くらいはしてやろう」

ザワ……ザワ……。

あまりにも無謀。そんな空気がギルド内に満ちる。

やがて何人かの男たちが声を上げて笑い始めた。

それも致し方ないというものだろう。ギルドのBランクと言えば、最早一人前の冒険者。下級の魔物は元より、大型の魔獣であっても退けることができる。ましてその上のAランクは、大型の魔物をも単騎で討ち取るエキスパート。そのAランクに上がろうと言うガイラと十に満たない少年。結果など、態々論ずるのも馬鹿らしい。

「マスター、そりややりすぎじゃねーの？」

「叩くときは徹底的に、が信条だからな」

そんな観客に対し、当事者たる少年はガイラと呼ばれた大柄な戦

士を見上げたまま笑いも嘆きもせずただ静かに傍観していた。

「やおら、希望が口を開く。」

「わかりました。勝てばいいんですね？」

その顔には自分よりも遥かに大柄で、経験豊富な戦士に挑むことに対する諦観も絶望もなく、あるのはただ不敵な、子供らしくない大人びた微笑みだけだ。

「は？ いや、ある程度戦えればそれでいいんだが……」

思いがけない少年の言葉に、マスターを始めとしてギルド中の人間が啞然とする。中には馬鹿なガキだと嘲笑する者もいた。

「それじゃ、早速始めましょう。闘技場、貸してください」

少年はスタスタと歩いていく。その歩調には一つの動揺もない。

「小僧」

そんな少年にガイラが声をかける。

「はい、なんですか」

「一応、名前を聞いておこう」

「希望のぞむです。真中希望。よろしくお願いしますね」

「うむ」

ガイラも希望の後を追って闘技場に入ってしまった。

「そんじゃ、時間無制限の一本勝負だ。準備は良いか？」

「うむ」

「はい。いつでもどうぞ」

そういう希望の得物は一本のロッドだ。右手で構え、左手を前に出す独特のフォーム。

その構えを見て、ガイラはほう、と感心のため息を漏らした。隙がないのだ。ちよつとやそつと武術をかじっただけの素人では断じてない。達人に近い隙のなさだった。

「……しかし、本当にその従者の少女は一緒になくていいのかい？」

「二対一はフェアじゃありませんから」

マスターが最後にそう尋ねるが、希望はまったく取り合わず、あくまで一人で戦うことを主張する。

仕方なくマスターは審判としての責務を果たすべく声を張り上げる。

「……はじめ！」

希望が仕掛ける。闘技場の床を蹴り、一気にガイラへと肉迫する。

「むん！」

そうはさせまいとガイラは大斧を振りつつ後ろに下がる。

「はっ」

希望はロッドで棒高跳びのごとく飛び上がり、大斧を回避。ロッドを振り下ろす。

「重厚戟！」

「ぬっ！？」

子供とは思えぬ重さの打撃にガイラは驚く。しかしいくら強化しようとするのは子供の力。すぐに態勢を整え弾く。希望はそれに逆らわず、空中で回転して綺麗に着地する。

「さすがに力じゃ話にならないか……」

希望はそう呟き、バックステップで後ろに下がる。

「まさか……」

ガイラは嫌な予感を感じ、大斧を構え直して希望に向けて走る。しかし、その時には既に遅かった。

「【ウインドモーメント】！」

ガイラの前方の砂が瞬間的な突風で巻きあがった。魔術だ。これにはガイラだけでなくギャラリーも驚愕した。

なぜなら、多くの集中力を必要とする魔術は普通、子供が扱えるものではないからだ。

基本子供というものは好奇心が旺盛で集中力が低い。魔術を使用できないのもその所為だ。それを希望は最下級のものとはいえ発動させたのだ。驚くのも無理はない。

そして驚きによる硬直は対処を不可能とするのに十分なものだ。
た。

「くっ!？」

視界を塞がれ、警戒を強めるガイラ。その砂煙の向こうから、希望の軽やかな詠唱の音色が響く。

「——故にこそ、我^{こいねが}希^はうは烈風の羽撃^はたき、蒼空の連弾!」
「スライガンナー!」

「ぬうおおおっ!？」

砂煙を貫いてガイラに襲いかかるのは圧縮された空気の砲弾。それが連なりガイラを中空へと打ちあげていく。

「これで……決めるっ! 臥竜風翔戟!」

打ち上げられたガイラの更に上空。竜をも臥せよと言わんばかりに力強い一撃が、空中で体勢を立て直せないガイラの胸に直撃する。
「ごはあっ!？」

如何に子供の力とはいえ、上空から全体重をかけて叩きつけられれば耐えること敵わず、ガイラは胃液と血の入り混じった液体を吐き出して倒れ伏す。希望はロッドをくるくると回しながらガイラに近づき、ロッドを突きつける。

「終わり、ですかね」

啞然、愕然。今のギャラリーの心情を表すとしたらそんなところだろう。

得物であるロッドを背に背負い直した希望は伏したままのガイラに手を差し出す。

「平気ですか? 怪我は?」

そのなんでもないと云った軽い仕草に、ガイラは悔しさや驚きよりも先に畏敬の念すら抱いた。長年の鍛錬を、こつもあつさりと飛び越えられてしまうと最早怨嗟の声もない。

「……肋骨が逝かれたか。が、私とて戦いの渦中に身を置く者。この程度の傷、なんてことはない」

「ダメですよ。折れた肋骨がもし肺を圧迫してたらどうするんです

か。待つててください」

希望はまたも詠唱を始める。しかし、織り込まれてゆく魔力は先ほどとは違い、穏やかなものだ。

「【ジオ】」

紡がれた名は神聖系下級治癒術。先ほどのスカイガンナーは中級魔術。だが、下級とはいえ、治癒魔術とは攻撃魔術に比べ、何倍も繊細で、行使が難しい。攻撃魔術ならば多少術式が荒くとも勢いで何とか発現させることは可能だが、こと『癒し』に限っては、勢いや力づくでどうにかできるものではない。丁寧に、細やかに。そのときに必要な集中力は攻撃魔術の比ではない。

「これでよし、っと。一応応急処置は済ませておきました。でも、なるべく早くちゃんとした治癒術師のところに診せに行ってくださいね」

「うむ。そうさせてもらおう」

未恐ろしい小僧だ。とガイラは呟き、ギルドマスターの方を向く。「マスター、見ての通りだ。この小僧、少なくともAランク以上の实力はある。まったく、一体どう鍛えればこうなるのか……」

「師が良かったんでしょう。僕も、それ相応の鍛錬を積みましましたしね」

「その受け答えが、既に子供のそれではないわ。まったく……」

皮肉気にそう吐き捨てるガイラにニコッとまた子供らしくない微笑みで返す希望。

「……ところで小僧。お主らは何故ギルド登録を必要としているのだ？ 金を稼ぐ必要があるとは思えんのだが……」

希望やシャインの着衣はそれほど上物とまでは言わないが、少なくとも貧乏人の着ることのできるレベルではない。何より丁寧にその物腰は育ちの良さを匂わせるものだ。

「いえ、ちょっとした旅に出てみようという話になりました。その時冒険者のライセンスを持っていれば何かと役に立つかと思ったんです。通行証代わりにもなりますし」

なるほど。確かにそれは確かだ。しかしガイラたちが気になって
いるのはそういうことではない。

「そもそも何故旅などと……しかも子供二人で」

「可愛い子には旅をさせろって言うじゃないですか。そういうもの
ですよ」

「このご時世に言葉通りの旅をさせる親か。この年でそのような実
力を身に付けさせたことといい、随分と型破りな御両親なのだな」

「ええ、まあ。でもいい人ですよ？」

「まだ親のフォローを覚える歳でもあるまいに……」

確かにそれはあの両親であつたことの弊害と言えるかもしれない。
と希望は苦笑した。

「……まだ、年齢を聞いていなかったな。小僧。お主の歳はいくつ
なのだ？」

「今年、五歳になりました」

最早ガイラたちに驚きはなかった。あるのはただただ深い呆れの
感情のみ。

「まったく……よからう！ お主らに十分すぎる実力があるのはわ
かった。だが旅をするとなれば知るべきことがまだ山のようにある
う。お主らのことだ。それも大概は学んであるうが、各街ごとの物
品相場など、実際に冒険者として旅をしていなければ知りようのな
いことなどを纏めて叩きこんでやろう」

「え？」

ここに来てようやく子供らしいきよとした表情を見せる希望。
それに気を良くしたガイラは、拒否は許さんとばかりに希望を抱え
上げて酒場の方へと戻って行く。

「あ、希望さま……」

そこで今まで沈黙を保っていた侍従服の少女がようやく戸惑いの
声を上げた。

「各街の相場などの方はわたくしが……」

「あはは、いいっていいって。それよりシャインも一緒に教えても

らおう。折角の厚意なんだしね」

「……はい。かしこまりました」

「……ところでそちらのお嬢さんは身を守る術を持つておるのか？」

「はい。奥様より魔導の理を少々。未熟ではありますが、身を守るくらいならば」

「騙されなくてくださいね。シャインが本気になったら僕なんて軽く消し炭ですから」

「はっはっは！ お主らはどこまでも規格外か！」

何かが吹っ切れたように大笑いするガイラに釣られて希望たちも自然と笑顔になる。

「よっしゃ！今日は俺のおごりだ！未来の英雄誕生を祝って宴会じゃあ！」

マスターの景氣の良い大声に他の客たちも歓声を上げる。

「あはは……随分と大事になっちゃったなあ」

「希望さま。お酒などは……」

「わかってるよ。僕たちまだ五歳なんだから」

「そうですね。ですが、あまり長時間滞在しますと酒気で御加減を悪くする可能性もありますので程々に」

「ああ。心配してくれてありがとう。シャイン」

冒険者たちの方は早くも飲めや歌えやの大宴会。希望たちのことを口実にただ騒ぎたいだけのようなので、途中で抜け出しても問題ないだろう。

「まあガイラさんの旅講座から抜け出すことの方が難しそうだけだね」

ニコニコと嬉しそうな表情を崩さない。

「とても嬉しそうですね。希望さま」

「当然だよ。男の子にとって、家族以外に力を認められることは何より嬉しいものなのさ」

「そういうものですか」

「そういうものです」

「おおーい！ 何をやっ取る！ こっちに来い！」

中々来ない希望たちに業を煮やしたのかガイラが早くも赤くなつた顔で手を振っている。

希望たちは顔を見合わせて苦笑し、どう抜け出すかを思案し始めるのだった。

第一部第一章「その名は……」（後書き）

こんにちは。小説家見習いの悠です。男です（一応）。

今回の主人公は真中希望。まあ僕の他の作品で多少出てきていますが、その希望と同一人物と言うことで構いません。知らない人には何のこっちゃ、という話ですが。

これはあくまでプロローグ的な部分ですのでまだタグにあるようなチートっぷりではありません。最強の五歳児はこの時のですが。

とりあえずこれからもぼちぼち更新していきたいと思えますのでよろしく願います。

それでは、悠でした！

第一部第二章「幸せな日常で」（前書き）

さて、調子よく二章目。こうやって書き始めはするする書けるんですよ。みんなそうですけど。

そして本格ファンタジー！ とか謳っておきながら今回はかなり日常。しかもシヨタ&ロリっこのお風呂シーン。……実に変態的ですが、ほのぼのだと悠は信じております。
ではどうぞ！

第一部第二章「幸せな日常で」

アカシック

第一部第二章「幸せな日常で」

「ただいま」

「ただいま戻りました」

希望たちは、混沌としていく酒宴と、ガイラによる特別講義という名の絡み酒から何とか抜け出して、ヘトヘトになりながら我が家へと戻ってきていた。

「あら、お帰りなさい。随分遅かったわね」

既に空は黄昏を通り越し、夕闇に染まっていた。五歳の少年少女が出歩くには随分と物騒な時間だ。……尤も、希望たちにただの五歳児と同じ認識はできないが。

「なんか、随分と盛り上がりつつあってね」

「あんまり遅いから有希、待ちくたびれて眠っちゃったみたいよ」

「ええ？ それは残念だな。折角ライセンスが取れたって報告がしなかったのに」

有希、とは希望の妹の名前だ。まだ三歳で、眠ったら梃子でも起きない妹の性格を希望は熟知していた。

報告は明日かぁ、と残念そうに肩を落とす姿は歳相応。とても先ほど大の大人相手に大立ち回りをしたとは思えない。

「奥様。お手伝いを」

「いいから、あなたたちはお風呂に入ってらっしゃい。シャインは

ともかく、希望は埃だらけでしょう」

「平気だよ。転んでないし、圧勝だったからね」

ふふん、と得意げな笑顔を見せる。あの大人びた姿からは想像もできない程に生意気そうな仕草である。

「それでも。闘技場で模擬戦なんてやったら汚れるものよ。入って来なさい」

「はい」

「あ、あの奥様わたくしは……」

「どうしたの？ 一緒に入ってらっしゃいな」

「で、ですがその……」

「どうしたのシャイン。早く行こう」

「あ、あああああですがその！」

「あらあら、シャインはおマセさんねえ。押し倒しちゃっていいから入って来なさい」

……五歳児になにを期待しているのだろうかこの母親は。案の定意味が理解できなかった二人はキョトンとするばかり。シャインも仄かに想いを寄せている小さな主との混浴に照れていたただけのようだ。

「ほーら、早く行ってこないとお夕飯食べさせてあげないわよ」

意地悪げな母親の言葉にわあ、とワザとらしく焦って見せた希望はシャインを引っ張って浴場へ向かった。

「ふう。あ、しまった……来たはいいけど、着替えとか持ってくるの忘れてた。シャインも取ってこようか」

「はい。……それにしても希望さま、相変わらず奥様方の前では子供っぽくなるのですね」

シャインにしては珍しく、からかうような口調だった。

「まあね。大人に舐められないように、って思うけど、やっぱりま

だ母さんたちには甘えたい気持ちもあるから」

「……希望さまはやはり、本質的に大人びているんですね」

「あはは、シャインに言われたくはないなあ。ホンシツテキ、なんて普通の子は使わないよ」

「朱に交われれば赤くなる、ということですよ」

そんな諺を使うところからして普通ではない。一体あの母親（と父親）はどんな教育を施したのだろうか。

「おっと、話し込んでいる場合じゃなかった。着替え着替えっと」
希望はトントンと軽い足取りで木製の階段を上り、自分の部屋に入る。ドアプレートには『きょうだいのへや』との文字。

「……お」

タンスから着替えを取り出し、改めて浴場に向かおうとした希望は、主のいない自分のベッドが小さく盛り上がっているのを見た。

「……まったく。また潜り込んでいるのか」

少しだけ布団をめくってみれば、そこには案の定愛しい妹の姿。自分が帰ってくるのを今か今かと待ち望んでいる内に眠ってしまったのだろう。希望は申し訳なさそうに、有希の頭を撫でて、一言「お休み」と言って部屋を出た。今日は有希のベッドで寝よう。或いは添い寝してあげるのもいいかもしれない。そんなことを考えながら。

「シャイン、お待たせ」

「いいえ。それでは参りましょう。お背中、お流しいたしますね」

「うん。僕もシャインの背中を流すよ」

「えっ！？ い、いえそんな……従者が主に背を流して貰うなど……」

「だからーいつも言ってるじゃないか。シャインは僕にとって家族。従者、なんて堅苦しく考えなくていいって」

「ですが……」

尚も何か言いたげなシャインの背を押して脱衣所へ。もじもじと脱ぎにくそうにしていたシャインより先に、希望は浴室へ。

きちんとかけ湯をしてから湯船に浸かる。お湯は希望の胸までもなくらい。希望にはこの湯の少なさが不満だった。

「偶には一杯のお湯に浸かりたい」

経済状況的にも出来ないことではなかったが、両親は節約の重要性と半身浴の健康に与えるいい影響など、とても五歳児には理解できそうもない理論を言い聞かせて譲らなかった。……理解できてしまう希望も希望だったが。

カララッ。

お湯に浸かってそう経たない内に、頬を軽く染めて湯浴み着を纏ったシャインが入室してきた。

「あ、やつと来た」

「す、すみません。その、心の準備といいますが……」

僅か五歳で、しかしあの両親の下で育てられたが故に早熟なシャインはかなり恥ずかしそうだ。希望はそれほどでもないが。

「で、では……失礼、します」

ザパツ、とかけ湯をして、子供二人で使うなら幾分余裕のある浴槽に二人で浸かる。

「……明日はクエストを見ようか。父さんたち、旅の費用も自分たちで稼げーなんて言うからさ」

「そうですね。ですが、それも醍醐味だそうですよ？」

「らしいね。まあこうして武器とかは用意して貰っているんだし、十分過ぎるくらいだよ」

パシャ、とお湯を掬ってチョロチョロと流す。そんな特に意味もないことをしながら、熱で僅かに上気して行く希望の顔を、シャインは熱以外の要因で赤くなっている顔でチラチラ眺める。

希望の容姿は整っている。子供ながら理性的な蒼い瞳。サラサラとした金髪。武術を習っているために均整のとれた体つき。誰もが

美少年と断じるだろう。今より更に幼い頃、この家の養子になった頃から見なれているシャインでも、未だまともに眼を合わせられない。お湯に濡れてしっとりとしたその髪や肌に吸い込まれそうに――

「……どうしたの？」

「っ!？」

すんでの所で我に返った。目の前には希望の心配そうな瞳。シャインは急速に頭に熱が集まってくるのを感じた。

「あ、あれ？ シャイン、なんか魔力が集まっているんだけど……
「ボフツ!」わ、わああっ!？ 魔力のオーバーロード!？ って
いうかオーバーヒート!？ か、母さん。母さーん!！」

顔を真っ赤にして眼を回したシャインを抱きかかえ、慌てて母親を呼ぶ。

「あらら、のぼせちゃったのね。……勿体ない。じゃなくって、はいはい。今運ぶから希望はそのまま浸かってなさい。もうすぐご飯もできるから手早くね」

「う、うん。シャイン、どうしたのかな。まだ浸かったばかりだったのに」

「……ちよーつとシャインを耳年増に育て過ぎたかしらね。まあ大丈夫よ。すぐに直るから」

というか希望としては何故呼びかけてその瞬間に母親が現れたのが不思議でならない。まさかずっと覗いていたわけでもあるまいに。

（……いや、母さんならあり得る）

そしてそれならどうして夕飯の準備が進んでいるのか。どうせ遠隔操作系の魔術でも使ったのだろうか。

「……そんなことして、また塩と砂糖間違えたりしなければいいけど」

母は料理上手だが、大雑把で適当だ。遠隔操作なんて緻密な作業を真面目にやらず、この間はセイユ（醤油）とソースを間違えてい

た。食べさせられる方の身にもなつて欲しいものだ。

「……」

希望は先ほどシャインを抱きかかえた手を眺める。

「……スベスベしてたな」

手を握ったりしたことは何度もあるし、風呂に一緒に入るのも初めてじゃない。でもなんだか、お湯に濡れて上気したシャインの肩や腕は、いつも以上に触り心地がよかった。なんだか気恥ずかしくて顔が火照る。

「……からだ、洗お」

そう言えば、結局流しっことは出来なかったな。そんなことを考えて、また気恥ずかしくなる希望だった。

「お風呂、上がったよー」

いつもより少しだけ早めに上がり、食卓に顔を出すと、まだシャインは気絶しており、代わりに父親が帰ってきていた。

「お、上がったか。希望」

「父さん、帰ってきてたんだ」

「つい今さっきな。母さんから聞いたよ。無事、ライセンスは取れたようで何よりだ」

食卓の隅には、父がいつも使っている槍が置いてある。綺麗に整備され、鈍く光る銀の槍には、年季を感じさせる細かな傷がいくつも入っていた。

「父さんに教えて貰った槍と、母さんに教わった魔術。どっちも上手く使えたよ。ありがとう、父さん、母さん」

希望はロッドを使っていた。しかし、それは子供故の筋力不足が原因で、本来ならば槍を使うのが希望の武術だ。

「そうか。明日はまたギルドに行くのか？」

「うん。何かクエストをやってみようと思ってる」

「お前たちなら早々危険ということもないだろうが、初めての実践になるだろう。あまり難易度の高いクエストは避け、まずは慣れることから初めて見ると良い」

「わかってるよ」

何度も口を酸っぱくして言われたことだ。何事も慣れることから全てが始まる。武術も然り、勉強や家事だってそうだ。修練を積むのは慣れてから。とはいえ……。

「でも、父さんの慣れてって遠いからなあ」

父親からすれば、今の希望たちは『慣れた』から旅に出させるのだそう。武器を使うこと、魔術を使うこと。父親たちからすれば、Aランククラスの相手に勝つのはまだまだ慣れた頃でしかないらしい。

（そんなことをガイラさんたちに言ったらびつくりするだろうな）
びつくりというよりぶつたまげることだろう。希望は苦笑して、

父親に今日の戦果を聞く。

「そう言えば父さん、今日はどうだったの？」

「ああ。問題ない。少々梃子摺ったが、無事に依頼を達成してきたさ」

「父さんが梃子摺るなんて想像できないなあ……」

父親は国から直接依頼を請けて普通なら難しい強力な魔物や深い遺跡などを調査する世界でも有数の冒険者、いや、特別名誉騎士だった。そんな父親が梃子摺ったというからには相手は相当な強者だったのだろう。

「……ん、ここは……」

どうやらシャインが眼を覚ましたようだ。まだ少し顔が赤く、意識もボーっとしているようではあるが。

「シャイン、大丈夫？」

「あ……希望さま……うう」

いきなりのぼせてしまったシャインを心配して希望が顔を覗き込むが、シャインは益々顔を赤くして縮こまってしまった。

「ほらほら、そんなことしたら余計に悪化しちゃうわ。ご飯も出来たから運んで」

「あ、はい」

「そういえば、有希はどうしたんだ？」

「有希なら、僕のベッドで寝ちゃってる。随分待たせちゃったから」
「そうか。じゃあ明日は大変だぞ？」

「覚悟してるよ」

「シャイン、お塩とって頂戴」

「はい……奥様。それは塩分の摂りすぎでは……」

「堅いこと言わない。まったく、誰がこんな余計な知識を身に着けさせたんだか」

「その……奥様方です」

いつもより一人分少ない食卓。一つだけ空いた席。そこに僅かな寂しさを感じ、それでも和やかに進む食卓。こんな日が続く。そんな何の根拠もない夢物語を、この頃の希望たちはなんの疑いも持たずに信じていた。

楽しかった毎日。幸せだった日常。それらが理不尽に失われるという現実を、信じたくなかった。いくら武術の才能があろうと、頭が良くとも、希望たちはそんなことも考えつくことのできない子供だったのだから。

第一部第二章「幸せな日常で」（後書き）

何やらきな臭い終わり方をしてやりました。物凄い不吉ですが、まだしばらくは不吉なことにはなりません。次回、はじめてのおつかい。……嘘です。初めてのクエストです。年齢的にははじめてのおつかいなハズですが、希望達は普通じゃありませんね。それでは、悠でした！

第一部第三章「ミドス森林」(前書き)

悠です。

今回は大分ファンタジーらしく戦闘メイン。新キャラもいるので
お楽しみください。
ではどうぞ！

第一部第三章「ミドス森林」

アカシック

第一部第三章「ミドス森林」

「おお小僧ども。やっと来たか。待っていたぞ」

翌日、案の定拗ねてぶー垂れた有希を宥めまし、有希が笑顔に戻ったのは昼も近くになってからだった。

昼も過ぎ、食事を撮ってからギルドに訪れた希望たちに杯片手のガイラが声をかけた。

「待ってた……って、別にガイラさんと約束はしていなかったと思いますけど……」

「なに、私が勝手に待っていただけだ」

「ってというか昼間からお酒ですか？ だめですよ」

「ただの蜂蜜酒だ。酒の内には入らん入らん」

朗らかに笑うガイラの隣に腰を下ろし、希望は今日の目的を告げる。

「今日は、クエストを見に来たんです」

「ほう、早速仕事を受けてみるか」

「ええ。そのつもりです」

「ふむ……どのような依頼を受けるつもりだ？」

ガイラの質問に、少し考えてから答える。

「そうですね……討伐系よりは、調査や探索系の依頼の方がいいです」

「そうか。お主なら討伐系でも何ら問題なさそうだが……。確かに、子供に討伐系を任せるのは問題か」

昨日の戦闘を経たガイラはどうしてもその認識が崩れてしまっているのだが、世間的に見て五歳児に魔物の討伐をさせるのもおかしい話だろう。

希望はギルドマスターにそのように伝える。

「おう、そういうことなら手頃な奴があるぜ」

マスターが見せてくれた資料の表紙には『ミドス森林の調査』と書いてあった。

「ミドス森林ならこの街からも近いですし、魔物もそう強いものはないと聞いています。確かに、調査内容によっては手頃だと思われる。希望さま」

「だね。必要ランクはDランク。駆け出し冒険者レベルか」

「お前らにやあ物足りねえかもしれんが、初めてのクエストならそいつで慣れておくのも悪かねえだろ？」

マスターの言う通りだった。まずは慣れること。という父親の言葉にも背かないし、近場とはいえ森というのはちょっとした旅気分だ。子供ならではの好奇心もくすぐられる。

「わかりました。詳しい話を聞かせてもらえますか？」

「おう、ちよつと待ってな」

・『ミドス森林の調査』

必要最低ランクD。Dランクの場合、最低四人一組かBランク以上の冒険者を随行させること。

近頃ミドス森林に生息する昆虫型モンスター『セントピード』や両生類型モンスター『ホーンフロッグ』などのモンスターによる被害が増えてきています。森に何か原因がある可能性が考えられるので森林内を調査。可能であればその原因究明と排除を依頼します。

「……『セントピード』や『ホーンフロッグ』……。確かに普段は森林内からは出てこないタイプのモンスターだな」

『セントピード』はその名通り巨大なムカデ。主に自分よりも小さな昆虫や植物を主食にしている。『ホーンフロッグ』は大きなツノを持った中型のカエル。どちらもそれほど強くはなく、一体や二体なら一般人でも十分対処できる。

「……わかりました。では、この依頼を受けます」

「そうか。んじゃ、コイツにサインしてくれ。……よし。確実に受理されたぞ」

希望たちのランクは、Bランク筆頭のガイラに勝ったことで同じくBランクという扱いを受けている。実力的にはもつと上だろうが、Aランク以上は実績もランクアップの条件となっている。

この依頼を受ける分にはまったく困らないだけのランクなので、マスターも何の問題もなくクエストを受理する。

「ふむ。ところで希望。お主らは魔術を扱えるようだが、ミドス森林のような場所ではどのような魔術が適当かわかるか？」

「氷属性ですね」

「ほう。理由は？」

その質問にはシャインが答えた。

「一般的には昆虫や植物種のモンスターが多いことから火が有効だと考えますが、火を使えば延焼を引き起こす可能性も高く、術者も危険に晒されます。更に冰雪系の魔術は同じく森林内に多く出現する八虫類種や鳥類種にも効果が高く、お勧めです」

「完璧だ。そのようなことも御両親に？」

「まあ、そんなところです」

「ふむ、一度会ってみたいものだ」

「それは……少し難しいかと」

希望たちの両親は本来世界的にも高名な実力者だが、騒がれることを嫌う両親が情報秘匿しているため、むやみやたらに両親を紹介することは禁じられている。

「いや、構わぬ。しかし、依頼を遂行するならそろそろ出なければならんだろう。気を付けるのだぞ」

「はい。色々ありがとうございました」

軽く会釈し、希望たちはギルドを後にした。目指すは、ミドス森林。

「ここがミドス森林……」

生まれてこの方、街から殆ど出たことのない希望には、街から目視出来る範囲でしかないミドス森林すら未知そのものだ。

「森……たくさんの生き物の息吹を感じる」

「どこから敵性モンスターが現れるかわかりません。御注意を」

人間の子供など、魔物にとっては飛んで火に入る夏の虫も同然だろう。ただし……。

「——心配ないよ」

ギャウツ！

「嵐戟！」

狼型のモンスターが嵐のごとき連続突きで吹き飛ばされる。

「このくらいのモンスターなら、寝てても倒せる」

この二人が、そんじょそこらの虫と思って喰らいつけば、立場が逆転すること請けあいであろうが。

ウウウウウ……。

獲物の思わぬ反撃に警戒したのか、狼のモンスター『ハウンド』は警戒するように希望たちの周囲を回る。

ガウツ！

『ハウンド』の声に反応し、周囲の茂みから更に三体のハウンドが出現する。

「……それは、わかっておりますが。【アクア・バースト】」

計四体の『ハウンド』。その足下から水が爆発的に膨れ上がり、

『ハウンド』たちを上空に吹き飛ばす。

「バリエーションです。【アイス・グレイヴ】」

吹き飛ばした水が氷柱となって『ハウンド』を貫く。一撃で『ハウンド』たちは絶命した。

「それに、心強い味方もいるしね？」

「……恐縮です」

ニコッと笑う希望に少しだけ顔を赤らめつつ、シャインは頭を下げた。

今の戦闘をガイラたちが見れば、また驚愕するか、目を疑うだろう。一連の魔術、シャインは全く詠唱をすることなく、名称を口にせずだけで発動させた。

——無詠唱魔術。

魔術師にとつては上級者の証とも言える難易度の高い技法である。その名の通り魔術の詠唱をすることなく、ただ魔術名を告げるだけで発動させるといった、単純且つ強力な技法。上級魔術を制御することよりも下級魔術を無詠唱起動させることの方が難しいとまで言われている技法だ。

「さっきの、オリジナル？ 【アイス・グレイヴ】って」

「いいえ、まだそこまでは。単なるアレンジです」

単なる、などと言つてはいるが、もちろんこれも高難度の技術だ。既存の魔術のシステムを書き換え、自分に使いやすいように調整する。^{アレンジ}

先ほどの魔術の元は【アイス・ニードル】。氷の針を複数生みだし敵に投擲するだけの下級魔術。しかしシャインは、その前に使った【アクア・バースト】の水を利用して、敵の至近距離から氷の槍を突き刺す魔術に書き換えたのだ。氷を一から生みだすよりも効率的で、至近距離で発動する故に回避がほぼ不可能。相当に実践的で効率のいいアレンジだ。

「それに、【アイス・グレイヴ】のアイデアは奥様が。わたくしは魔術の書き換えの練習として書き換えを一からやるように言われた

だけですのぞ」

なんてことはないように言いつつ、シャインはメイド服に血が飛んでいないか確認する。

「ん……？」

ガサガサッ！ と茂みが揺れて、何かが逃げていくのを確認する。

「蛇……？」

魔物というほどの大きさではない。恐らくは普通の蛇だろう。特に気にすることなく、希望たちは森の奥へと進む。

奥へと進むにつれ、希望はあることに気がついた。

「……やけに蛇が多いね」

森の入口でこそ最初の『ハウンド』のようなモンスターが居たが、奥に進めば進むほど八虫類。特にサーペント系の魔物ばかりが襲いかかってくる。希望たちからすれば大して脅威にはならないが、とにかく数が多い。

「もしかして、『セントピード』たちはそれで……？」

サーペント系の魔物は『セントピード』のような昆虫型や『ホーンプログ』のように自分よりも小さな八虫類種を主食としている場合が多い。サーペントたちの数が増えて、森に住めなくなった彼らが人里までやってきたとすれば一応の筋は通る。

「……これは、もしかしたら討伐系のクエストに分類されるかも」

増えすぎたサーペント系モンスターの除去、といった形で。

「【ヘイルガンナー】！……そうかもしれないね」

無数の雷を弾丸として打ち出す中級魔術で迫るサーペントたちを八チの巢にしつつシャインが応じる。

「シャイン、大丈夫かい？」

「……魔力や精神力は何ともありませんが、正直なところ、少々疲れが溜まってきているのは否めません」

そうだろうな。と希望は頷いた。戦士として基礎体力もある希望に比べ、純粋な魔術師であるシャインの体力は普通の五歳児に毛が生えたくらいのものだ。ミドス森林は密林と言うほどの木々は茂っていないが、それでも平地よりは遥かに歩きにくい。疲れが溜まっても仕方ないだろう。

「……とすると、この辺りで切り上げてギルドに報告するのが最善かな？」

深入りは危険だ、と勘が囁いている。元より原因の排除は可能であれば、だ。原因自体は判明したのだし、ここで帰って引き継いだとしても問題はない。

「よし、それじゃあここら辺で一端……っ！」

希望が踵を返し、出口の方まで戻ろうとした次の瞬間、希望は反射的にその場を飛び退いた。

ゴシャアツと凄まじい音がして、希望の立っていた地面が爆砕する。幾つか石礫が当たって痛みが走る。

「っち！」

今の一撃で仕留めるつもりだったのか、影は大きく舌打ちをして体勢を整える。

「……っ！？ お……女の、子……？」

襲撃者の顔を見た希望は、予想外の事態に驚きを隠せない。ただ今、希望をあわや圧殺しかけた襲撃者は、間違いなく女の子。それも希望と同じ年くらいなの、だ。輝くような深紅の瞳が印象的だ。

「待って！ どうしてこんなっ」

「もんどーむよーっ！」

少し舌っ足らずにそう叫ぶ少女は、あろうことか素手で呐喊してきた。

「う、わっ！？」

ロッドで受け流そうとした希望が勢いを流し切れずに吹っ飛ばされる。不意の一撃の時といい、凄まじい臂力だ。

「希望さまー！」

「シャイン離れて！ よくわからないけどこの子、本気だ！」

「わ、わかりました！」

「よくもーっ！」

「うわわっ！ ちょっと待ってってば！ 話を……」

「あたしのトモダチ返せよーッ！」

「と、友達？」

少女の攻撃はただ力任せにぶんぶん振り回してくるだけなので躲し易い。だが、一発でも貰えばアウトなほどの威力を持った一撃。そのプレッシャーがすごい。

「ヴェーム！ バンバー！ サーピイ！ みんな返せー！」

どうやら誰かの名前のようだが、希望には何の心当たりもない。

「あたしのトモダチ！」

「だ、だから……僕は知らないって！」

「うそ！ あたし見た！ あんたたちが殺したの！」

「何かの間違いじゃ……」

少女はようやく止まり、涙目でびっ！ と希望たちの後ろを指差してきた。

「その子たち！ トモダチ！」

少女が指差しているのは魔物たちの死骸。希望たちが倒したサーペントたちだ。

「え……トモダチって……」

「まさか……魔物が？」

「もんくあるかーっ！」

「うわっ！」

「あうっ！？」

また殴りかかってきたので反射的にカウンターを入れてしまう。

少女は僅かに赤くなった額を抑えてうーっと唸っている。

「ご、ごめんっ！ っていうか、ちゃんと話を……」

「もー怒った！ みんなのかたきー！」

その瞬間、少女の纏っていた雰囲気が一変した。

「っ!？」

「シューウウウウウ……」

紅く染まった瞳孔が縦に裂ける。体は鱗のようなもので覆われていき、犬歯も長く伸びる。

「先祖返りっ!？」

シャインが声を裏返しつつ指摘する。

——先祖返り。

その名の通り、自らの先祖たる存在に体を変化させることである。過去に異種族と交わったことのある家系で稀に起こる突然変異である。

「まさか、あの子がサーペントたちの増えた原因!？」

「死んじゃえ!」

「っ!」

相変わらずの特攻。しかし先ほどとは速度も、その威力も、何もかもが別次元。辛うじて躲した希望だが、同時に起きた衝撃波で吹っ飛ばされた。

「希望さま!？」

「だ、大丈夫! 当たってないから。でも、とりあえず大人しくさせないと。シャイン、疲れてると思うけど、手伝って!」

「はい!」

「ぶつとべーっ!」

「それは、こちらのセリフです! 【ウォーターキャノン】!」

「わぶっ!？」

水の砲弾が少女を直撃し、飛びかかろうとした少女を押し返す。

……いや、押し返そうとした。

「ぐ、ぐぐぐ……」

「そんな……水圧に抗っている!？」

熊でも数メートル吹き飛ばす水の砲弾を、少女は真っ向から受け止めている。まともな腕力じゃない。

「なら……【アイス・グレイヴ】!」

「きくかつ！」

「なっ……」

先ほど『ハウンド』を葬った氷柱で攻撃するが、少女の体には傷一つ付かない。

「集え、小さき地の妖精。我希うは大地の身動き。【クエイク】！」

シャインのように無詠唱の魔術は使えない希望だったが、シャインの稼いだ時間を使って詠唱を完了していた。

「うきゃっ!？」

少女を中心とした小範囲に軽い地震が起きて、少女は堪らず尻もちを着く。

「衝戟！」

「きゃん！」

すかさず衝撃波を飛ばして距離を離す。ダメージが徹った様子はなかったが、あの少女と接近戦をするのは危険だと判断して希望は距離をとることにした。

「基本的には遠距離から魔術。近づかれたら僕が引き離す！」

「はい！」

言うが早いかシャインは速度重視の魔術を連射して少女を狙う。

その間に希望は呪文詠唱。

「彩るは鮮血、風迅の路に命なく、我希うは颯の魔弾。屍山血河に活路を拓け！【ハリケンロード】！」

「いたたたたたっ!？」

普通の魔物や人間ならば細切れにされるような殺傷性上級魔術を放つても少女は精々が痛がるのみ。凄まじい防御力だ。

「硬くて強い……単純だけど……」

それ故に、対処法が限られる。

「なら……集いて踊れ風の精、全てを巻き込み空を舞え、我希うは昇空の戯曲！【エア・サーカス】！」

「【クエイク】！」

「わ、わきゃああああああっ!？」

突如足下から巻き起こった突風に、シャインの魔術でバランスを崩した少女は抵抗も出来ずに巻き上げられる。

「シャイン！ 重力！」

「【グラビティ・ダウン】！」

「あ……ッ！ ぐう！？」

遥か上空から倍加した重力で叩きつけられた少女は流石に息を詰まらせ倒れ伏す。ガイラの時もそうだったが、生物の体の構造上、打撃にいくら強い強固な体を持っていても体内に響くような攻撃はかなり効くものだ。現にあれだけ魔術を受けてもピンピンしていた少女も、今は身動きができないくらい弱ってしまっている。

「ごめん……でも、話を聞いて欲しいんだ」

「あ……う……」

少女の深紅に輝いていた瞳が光を失う。すると……。

「っ！？」

「な……」

希望とシャインは、その光景に絶句し、立ち尽くすしかなかった。

第一部第三章「ミドス森林」(後書き)

さて、一体希望達は何を見たのか！？　そして初クエストの結末は！？　という辺りで今回は終了です。ふう、それにしても呪文詠唱考えるのが大変です。いずれはDBやネギま！　のごとくインフレ起こして詠唱する奴なんかいなくなると思うのでそれまでの辛抱か……。

それでは、悠でした！

第一部第四章「ヒカリ」（前書き）

謎の少女編最終話。といふかなんといふか。
まあここで長々と語っても仕方ないですね。
ではどうぞ！

第一部第四章「ヒカリ」

アカシック

第一部第四章「ヒカリ」

希望たちは愕然とする他なかった。

「これ、は……！？」

「蛇……？」

そう、それはまさしく蛇であった。少女の目から力が消えると同じ時、目の前の木々が消え、代わりに竜と見紛うばかりの大蛇が鎮座していた。

「おかあさん……」

ふらふらと立ち上がり、その大蛇に駆け寄った少女はそんな風到大蛇を呼ぶ。

「お母さんって……」

『よい。もう良いよ。我が娘……』

普通の、声帯を震わす声ではなく、直接頭に響いてくるような声。それは間違いなく、希望たちの目の前に鎮座する大蛇のもの。

「しゃべった……」

先ほどから、自らの常識を覆す出来ごとばかりで啞然とする他ない。希望たちの戦闘を見たガイラたちもこんな気持ちだったのだろうか。

「でも……おかあさん」

『よい』

「う、うん……」

『小さき人の子よ……』

「え……は、はい」

『我が娘が迷惑をかけたな。すまなんだ』

魔物からの謝罪の言葉。

『そして……そなたらの目的は何ぞ？』

「僕たちは……最近この森の生態系がおかしいのでは、との依頼を受けて調査を……」

大蛇はそうか……。と悲しそうに眼を伏せた。

『それは、我が娘が我のために森中から食料を集めてきていたのだろ。我はこの通り、満足に動くことも叶わぬ身……しかし、些かやり過ぎていたのも否めぬな。大方、我の食糧ついでに自分のおやつも……などと考えたのであろうが』

「う……」

凶星だったのか、少女が眼を逸らす。

『しかし……もうよいのだよ。我も……もう、生きるに飽いた』

「そんなん……おかあさん！」

『元より寿命なのだよ。我の命は恐らく、もう数刻と持つまい……』
「や！」

少女は拒絶して大蛇に飛びつく。あれだけのパワーで抱きつかれても、大蛇は小揺るぎもしない。

『……小さき人の子よ』

「……はい」

『この娘を、任せてもよいか……？』

「……なぜ、僕に？」

『一つは、もう我が永くなく、次に何者かが来るまで持たぬである故に。もう一つは、そなたを見込んでのこと』

「見込まれるようなことをした覚えは……」

むしろ、大事な娘さんを思い切り伸した大悪人と取られても仕方がない。

『そなたらは、娘の変容を見ても尚、話を続けようとしていた。最初こそ驚いていたが、我が娘を異形の怪物と見ることなく、今もこうして我と会話出来ている。それだけでも、見込むに相応しい』

大蛇は、自らに抱きつく少女を愛おしげに眺める。

『我が娘……おまえは人の世で生きなさい。幸せにな』

「おかあさん！」

『この子は、生来頭の良い子だ。できれば、色々と教えてやって欲しい』

「……はい。必ず」

希望たちからも、この大蛇の命の灯が、今にも消えようとしているのがわかった。

『……小さき人の子よ。もし……我が古き友、月影刹那と会うことがあれば、一つ言伝を頼みたい。“ニーズヘッグは先に逝く”と……』

「……きつと」

その言葉に満足したのか、大蛇——ニーズヘッグはその身を深く横たわらせた。

「おかあさん……」

『さらば、だ……我が、愛し子』

サラサラと、光の粒と消えてゆくニーズヘッグ。他の魔物にはない死の形だ。それだけ高位の魔物。もしかしたら、伝説級の魔獣だったのか。

「……………」

輝く光の粒子の中、少女は呆然と、目の前で起こったことが信じられないというように立ち尽くしていた。その光景に少しの間見惚れた。

静かに数秒間黙祷を捧げてから、希望は少女に声をかけた。

「あの……えつと」

呼びかけようとして、そう言えばまだ名前も聞いていなかったことを思い出した。

「名前、教えてくれるかな」

「……………」

少女は無言。

「えと……………」

こんな時にどうすればいいのか。希望にはよくわからなかった。身内に不幸があつたこともないし、修行ばかりの日々で、同年代の子供はシャインくらいとしか接してこなかったから。

「あ、そうだ。僕は希望。真中希望」

「シャインと申します」

遅まきながら二人して自己紹介する。シャインのファミリーネームがないのは、赤ん坊の時に拾われてきたからだ。敢えて言えば真中シャインとなる。

「なまえ、ない」

「え？」

「なまえ……………」

「名前、ないの？」

少女はコクリと頷いた。

「えと……………じゃあ、どうするかな……………」

悩む希望に、少女は苦々しげな顔で話す。

「でも、あの人たちはこーづきって呼ばれてた」

「こづき？ あの人たちって？」

「あたしを……………すてたひと」

捨てた人……………もしかして、本当の両親だろうか。少女は先祖返りとはいえ、人間だ。ならばあの二スヘッグが本当の母親、ということはないだろう。

「こづき……………上月、かな？ 多分ファミリーネームだ」

「……………やだ」

「え？」

「そのなまえ、きれい。きれいなひとたち」

「でも、本当の両親の名前だし……………」

「やなの！」

頑なに否定する。

「……わかった。じゃあそっちでは呼ばない。ファーストネームの方を考えよう。両親からは、なんて？」

「……や」

「そっか……じゃあ、改めて考えよつか。うーん……」

そうは言っても、少女とついさっき会ったばかりの希望に、少女に対する明確なイメージがあるわけでもない。

（いや……あることはあるんだけど……）

流石にそれを口にするのは憚られる。

（なんせ、力が強い、とか体が硬い、とかだもんなあ……）

正しい特徴ではあるが、女の子の名前を付ける際に有用な特徴とも思えない。まさかりキちゃんだのカタコちゃんだの付けるわけにもいかない。

「いや、っていうかもっとマシな名前もあるだろうに」

自分で考えておいて呆れる。でもじゃあどうすればいいか。

「……うーん」

ちらり、と横目でシャインを見る。

物心ついた頃には一緒にいた、もう一人の妹のようで姉のような家族。他にも幼馴染だったり専属メイド（自称）だったり色々あるが、それはさておいて。

「似てる……かも」

親を失って、自分と一緒に居ることになる。その境遇が。そして、光の粒子が少女を囲み、その中で立ち尽くす少女の姿。踊る光の精たちに祝福されているような、そんな光景。

「ヒカリ……」

「え……」

「光。上月光。どうかな？」

上弦の月が齎す光。そんな名前。尤も、希望はそんなことまでは考えていなかったが。

「ひかり……」

「えと、さつき、ニーズヘッグ……さん？　の光に包まれている君が綺麗だったから」

「きれい……ひかり？」

「うん」

「……うん。ひかり。あたし、ひかり」

響きが気に入ったのか、何度もひかり、ひかりと繰り返して確かめるように呟く少女。いや、光。シャインのジトーとした視線が少し痛かったが、少し光の表情は明るくなったのでまあよしとする。

「う~~~~むあー!!」

しばらく自分の名前を呟いていた光が、いきなり唸って叫び出した。

「うわっ!？　ど、どうしたの光？」

「なんかね、こう、むあー!　ってしてくるの。おかあさん、死んじゃってかなしくて、でもなんかぼかぼかして……だから、むあー!」

「お、落ち着いて!」

「あんた!　えと、のぞむ!　あたしともう一回しようぶよ!」

「ええ?　ど、どうして……」

「なんかむあー!　ってかんじだから!」

「……要するに、暴れて発散したいのですね」

はた迷惑な。でも確かに、体を動かして気分を晴らすというのはいいかもしれない。

「……うん。わかった。それじゃ、シャインは手を出さないでね」

「ですが……」

シャインの危惧もわかる。光の攻撃は大味だが、一撃一撃のパワーが半端ではない。一撃でも貰えば即大けがは免れない程に。

「大丈夫」

そんな危惧を余所に、希望は不敵な笑顔を見せる。

「——例え一度だって触れさせない」

ヒュン！ と軽くロッドを旋回させる。

「……いー度胸。ぶつとばーっす！」

光も腕をぐるんぐるん回して準備万端。もう何を言っても止まりそうにないとシャインは判断して、後ろに下がる。もし本当に危なければ止めよう、そう決意して。

「……さっきみたいにチクチクはやだ」

そこそこの威力の魔術だったはずだが、光にとっては竹ぼうきで突っつかれた程度のダメージでしかなかったらしい。

「大丈夫。使う暇を与えなければね」

「ふふん、じょーとーよ！ あのチクチクがなければあんたなんかイッパツよイッパツ！」

「君はその一発だつて当てられず、僕に負ける」

両者の間に緊張感が走る。仕方なくシャインがその辺の石ころを二人の中心に向かって投げ入れる。それが、開始の合図となった。

「さいしょから、さいだいパワー！ シャアアッ！」

光はまた先祖返りの力を使い、全身を鱗の鎧に包む。

「えええーい！」

振り下ろされる拳を跳びあがって躲す。すかさず繰り出される蹴りを利用して、希望はさらに飛び上がる。

「降り注ぐは雷光、我希うは紫電の驟雨！ 【ボルテック・ニードル】！」

細い雷撃が幾条も光に降り注ぐ。堪らずジタバタともがく光。

「ふあっ！？ ち、チクチク！ ピリピリ！」

普通はピリピリ程度では済まない。雷系の魔術は下級でも十分過ぎる殺傷力を持っているというのに。痺れもすぐに取れたらしく、落ちてくる希望を不敵に見上げる。

「ふふーん！ おっこちてきたときがアンタのさいごよ！」

光は希望の着地点付近で力を溜める。……というか光の腕力で力を溜めたりなんてしたら大ケガどころか粉々だ。それこそ“最期”になりかねない。

「それは勘弁だね……呼び覚ますは旋風、我希うは天翔る資格！
【フローウィンド】！」

魔術で生み出した風に乗り、グライダーのように滑空して光の居るところから離れていく。空を自由に飛びまわれる魔術もあるにはあるが、流石に希望はその魔術をまだ習得していない。

「ああ！？　ずるい！」

「撃ち抜くは翔撃、風姫に見染められし忠誠の銃士、故にこそ、我希うは烈風の羽撃^{はは}たき、蒼空の連弾！　【スカイガンナー】！」

どうせ馬鹿正直に当てたところでダメージにはならない。希望にそれだけの攻撃力はない。なら搦め手で勝負する。そのために、風の魔弾を光ではなくその周囲に着弾させる。

「わぶっ！？」

圧縮された風の弾が、周囲の大地を抉って行く。

「巻き起こるは息吹、遙か天空を舞う竜王の息吹、故にこそ、我希うは荒ぶる旋風！　【ブラスト・サイクロン】！」

光を中心として発生した竜巻が、【スカイガンナー】で捲れ上がった大地ごと光を巻き上げる。

「おなじては……きかないっ！」

「わかつているさ……っ！」

中空で体勢を立て直す光と入れ替わりに、希望が漸く着地する。

「これで、さつきと立場は反対だ！」

「かえりうち！」

落ちてくる光に対して希望はロッドを構える。

「いいいいりやああああ！！」

「っふ！」

「へっ！？」

空中から繰り出した光の渾身の一撃はあっさり希望に躲かれて、光は耐性を崩す。

また入れ替わりに飛び上がった希望は、そこで溜めていた力を一気に解放する——！

「風翔戟・鷹！」

「ぎゃうっ！？ がっ！」

先ほどと同じように、空中から思い切り地面に叩きつけられた光は脳震盪と体内へのダメージで、意識こそ失っていないまでも蛇化も解けてしまっている。さらにその上に巻き上げられた土の塊までもが降り注いだ。

「ふああああー！？」

「そこまです。この勝負、希望さまの勝利です」

特に決めていたわけではないが、なし崩し的に審判役となっていたシャインが終了の合図を送る。スタツと着地した希望は、土をどかして光を掘り起こす。

「う、ううー！ またさっきとおんなじ負けかたしたあー……」

「光は戦い方が素人だからね。空中で体勢を立て直したまでは良かったけど、空中での攻撃の仕方がなってなかった」

希望がさっきと立場が反対だと叫んだのは、光を真っ向勝負に持ち込むため。足で踏ん張れないのに渾身の力で攻撃して躲されれば体勢も崩れる。

「後は、そこを撃ち落としておしまい。ってね」

「おのれ……」

まだくらくらするのか視線が固定されていない。

「あー……大丈夫？ かなり思いつきり入っちゃったけど」

「こりえくらい……なんでもにやいわひょお……」

呂律が回っていない。明らかに大丈夫ではない。

「……仕方がありませんね。しばらくここで休憩していきましょう」

「そうだね。僕たちも、色々あつて疲れちゃったし」

希望たちはその場にペタンと座り込む。地面に叩きつけられた光はもちろん、希望も結構泥だらけだ。

（も、もしかしてまた、希望さまとお風呂に入れますでしょうか……）

昨日は失態を見せてしまった。折角背中流しっこをしようと言

ってくれたのに何と勿体ない。

（い、いえいえいえ！ そうではなく……）

……でも良く考えると希望たち以上に泥だらけの光を連れて帰って、あの希望の母親が放っておくだろうか？ いやおくまい（反語）。

だとすると、例えば希望と入るにしてもこの少女は確実についてくるわけで……。

（くっ、今回ばかりは気絶するわけには……）

万一気絶等しようものならこのどう見ても貞操観念が欠如している少女がナニをやらかすかわかったものではない。

「……なんとしても、それだけは阻止します」

希望さまの貞操のためにも！ と、明らかに考え過ぎな妄想をして、ヘンな使命感に燃えるシャイン（五歳）なのであった。

第一部第四章「ヒカリ」（後書き）

と言うわけで、謎の少女改め上月光でした。当然レギュラーでメインヒロインです。シャインもですが。この作品全体でのメインヒロインは後最低でも二人を予定しておりますが、どちらも登場はいくらか先になることでしょう。しばらくはシャインと光の二人だけ。そして、本当に耳年増過ぎるシャイン。光の貞操観念が云々というか、そもそも五歳児で貞操観念を持っている子の方がおかしい。あの母親はとんでもない教育を施しております。

それでは、悠でした！

第一部第五章「幸福の終わり・運命（フェイト）の足音」（前書き）

こんにちは。悠です。

第一部、早くもクライマックス。……本当に早いですが。まあこの第一部は全体で言うところプロローグの前（！？）の前の前（！？）みたいなもんですからね。さっさと行きます。
では、どうぞ！

第一部第五章「幸福の終わり・運命（フェイト）の足音」

アカシック

第一部第五章「幸福の終わり・運命^{フェイト}の足音」

「くぴー……すー」

少し経って、光は可愛らしい寝息を立てて眠ってしまっていた。先ほどの戦闘によるダメージは全く感じられない。流石の防御力とあったところか。

「……どーするかなー。背負って行くわけにもいかないし……」

まさか同じくらいの背丈の少女を背負って戦うわけにもいかない。というか出来ない。

「背後から襲われた時の盾くらいにはなるのでは？ 頑丈ですし」

「いや、シャインそれは……」

「冗談はさておき、とりあえず起こさないことにはここから動けない。何故というのも光が希望の膝を枕にして眠りこけているからである。所謂膝枕。シャインの反応が冷ややかなのもその所為だろう。」

「では起こしましょう。【ライトニング】」

「うきゅっ!？」

「うわ、シャイン!？」

シャインの手から迸った雷光が光を直撃する。ビクンツと光の体が跳ねて、希望の上から転がり落ちる。

「……上手く行きました」

「いやいや、いくら光が頑丈でも今のはちょっと」

「痛覚が鈍そうだったので、普通にゆすつても起きないのでは？」

だから雷撃。短絡的というか乱暴な選択である。

「……まあ、確かに八虫類は痛覚が鈍いつて聞くけど……」

あくまで光は人間族であることを失念してはいけない。

「あうあう……な、なに？」

が、そんな希望の心配を余所に、光は眼を回しつとも起き上がった。

「……」

どうだ、とばかりに軽く胸を張るシャイン。希望は少しだけ頭痛がして頭を押さえた。

「まあ、起きたならいいか。光、街に戻ろう」

「……まち」

「イヤな思い出もあるかもしれないけど、少なくとも父さんと母さんなら君を迫害したりしないから」

「……ん。だいじょぶ。のぞむ、いっしょだし」

「そか」

「……この短時間にここまで……。我が主ながらなんという求心力！ 呆れ、苛立ち、感心、尊敬。様々な感情が入り混じった複雑な表情を浮かべるシャイン。当然その中には嫉妬の感情も含まれる。

「……ところで、忘れそうになってたけど、依頼の方はどうしよう」

「そうですね。ですが、魔物たちを操っていた少女はこうして確保出来たのですし、ニーズヘッグさまも御臨終なされましたし……」

「うん……ねえ光。光が餌を集めるのに使っていた蛇たちって、もう他の魔物を襲わない？」

「ん……わかんないけど、ごはんの時くらいはおそうかも」

それは食物連鎖。自然の摂理であるからして問題なし。数が増えていたというよりも光による乱獲が原因だったので、森の異変もこれで解決だろう。

「それでは、ギルドに報告して帰宅することにしましょう」

「うん……あ、ちょっと待って」

希望は先ほどまでニーズヘッグが横たわっていた場所へ行き、何やら作業を始める。

「どしたの？ のぞむ」

「……君のお母さんや、友達のお墓を作ろうと思って。何もなしじや可哀そうだから」

「おはか……？」

「死んじゃった人を、悼むために建てるものだよ。どうか安らかに眠ってくださいってお祈りするんだ」

「あたしもやる！」

「……そうですね。その方がいいでしょう」

ニーズヘッグの身体は粒子となって消滅してしまったので、光の友達だった蛇たちの死体を埋葬する。ふと、希望がキラリと光るモノを見つけた。

「あれ……これは」

拳大の、大きな紅い宝玉。真ん中に金色の線が一筋走っていて、そこはかとなく魔性の雰囲気がある。

「あ……おかあさんのおい……」

「え？」

率先して土を掘り返していた光が、希望の持つ宝玉を指差した。

「それ、おかあさんのおいがする！」

「……高位の魔獣や神獣の類は、死に際に形見とも言える物を残すそうです。大抵が高純度の魔力が凝縮されていて、魔術的価値も高いそうです。中にはそれを目当てに魔獣や神獣を狩るハンターもいるとか」

シャインの説明で、間違いなくこれはニーズヘッグが遺したものと確信した。言われて見れば、この中心に走る金色の線は、蛇の瞳孔にも見える。言ってみれば『蛇神の紅眼』^{ニーズヘッグ}と言ったところか。

「これ……」

希望は光にその宝玉を手渡した。光はそれをしばらく見つめると、

ぎゅつと胸に抱え込んだ。

「……じゃ、それは光が持っていくといい」
「うん。そうする」

本当は墓前に供えたり骨代わりに埋葬したりするものかもしれないが、光が離しそうにないし、なによりそんなに高価なものを安易に埋めたりするわけにもいかない。形見であるなら、光が持っているのが一番いいだろう。

「おかあさん……」

そのまま全員無言で土を埋め立て、墓石代わりの岩を、魔術でコ
ーディングする。

「……」

黙祷。

数分の空白の後、希望が立ち上がり、シャインが続く。

「光」

「……うん」

「また、来よう。ここなら、いつでも来れるさ」

「……うん」

名残惜しげに、それでも涙は見せずに光は立ち上がる。

「じゃあ……行こうか」

「ん……」

帰り道は、光が居るからなのか魔物も出現せず、休憩したこともあつてあっさりと出口まで辿りつくことができた。

そして――

そこには――

絶望が、あつた――

「なん……だ、あれ……」

シャインも、言葉を失って立ち尽くしている。光でさえも、眼を丸くして呆然としている。

——街が、紅く彩られていた。

目視できる範囲にあった希望たちの故郷が、炎に包まれ、黄昏時の空を赤く染め上げていた。

「のぞむ……あれ、火？」

「ど、どうして……」

「希望さま！ 今すぐ街へ！」

「う、うん……」

珍しく焦ったようなシャインの声で希望は我に返った。

（そうだ、有希は……？ 父さん、母さんは！？）

気がついたら、もう居てもたつても居られなかった。

「っ……クソ！」

「あっ！ のぞむ！ まって！」

待てない。待てるわけがない。

「無事でいて……！」

そして。

「ひ……どい……」

街は完全に破壊し尽くされていた。

ガレキの山となった家屋。犯されつくし、鬻り殺されたと思われる女性の屍。屍肉の焼けた臭い。貪られたと思われる子供の骸。…

めちやくちゃだった。

「お、まだ生き残りがいるぜ？」

——魔族！

「一丁前にロッドなんか背負っちゃってまあ。まさか、戦うつもりか？」

「……当り前だ……っ！」

背中 of ロッドを、血が滲みそうなほどに握りしめる。

ああ、今なら……。

「光の気持ち、痛いほどわかる……っ！」

地を思い切り蹴って魔族に迫る。予想外の速度に一瞬驚いた魔族だったが、すぐに反応して迎撃のための剣を振りおろしてくる。

「風翔戟・燕！」

その剣を、まるで慣性を無視するかのごとき歩法で回避し、魔族の懐に潜り込む。

「なにっ!？」

「双昇戟！」

すかさずロッドと共にサマーソルトキックを繰り出し、魔族の下顎を蹴りあげる。

「がっ!？」

子供と思って舐めていた魔族は、ロッドと蹴り、両方ともモロに喰らった。魔族であっても体の構造は変わらないらしく、脳震盪を起こして倒れる。

「とどめ……っ！」

「希望さま！」

魔族にトドメの一撃を叩きこもうとした瞬間、シャインの魔術が希望の背後に迫っていたもう一人の魔族を撃ち抜いた。

「シャイン!？」

「御無事ですか!？」

「う、うん……ありがとう」

怒りに我を忘れ、背後の敵に気がつかなかった己のミスだ。シャインがいなければ殺されていただろう。

「でりやりやあ〜！」

少し離れたところでは光が魔物たちを薙ぎ払うように潰している。背後から攻撃を喰らおうがお構いなしだ。

「とにかく、奥様方を探しましょう。わたくしただけで動くのは危険すぎます」

「そ、そうだね。光！」

「あいさー！」

牛のような魔物を振り回して他を薙ぎ払っていた光が、その魔物を投げ捨てて近寄ってきた。

「僕の、父さんと母さんを探そう。二人なら、こんな奴らになんて負けないし、それに有希も……」

一緒に居る筈の妹を思い出し、気が逸りそうになる。

「とにかく、僕の家の方へ……」

ドオン……！

「！」

爆音の発信源は、間違いなく希望たちの家がある方向。

「つ有希！」

思わず走り出す。そしてその途中で……。

「む……ぐう、小僧、か……？」

「！？ ガイラさん！」

「逃げろ……この街は、もう……」

——終わり。

その単語が脳裏にチラつく。しかし希望はそれを頭を振って消し去る。

「そんなことより、ガイラさん酷い傷だよ！　すぐに治療を……」

「そんなことはしなくてもいい……！！」

「っ！？」

「私のことなどいい……どの道助からん……。それよりも、お前たちがここから逃げるのが……ぐうっ！」

「傷が痛むの！？　ねえ、ガイラさん！」

「良いか……よく聞け……。お主たちは、間違いなく英雄になれるだけの器だ……。こんな、ところで……そんな幼い命を散らしちゃならん……！」

「ガイラさん！」

もうガイラは希望たちの姿が見えていないのか、見当違いの方向を眺めている。それが希望たちに、否応なく死を感じさせる。

「生きる……小僧……達者、で……」

「ガイラさん!!」

揺すつちやいけないとわかっていても、希望はガイラの身体を揺すり続ける。

しかし、もうガイラがその口を開くことはない。ガイラは……死んだ。

「ぐ……」

「のぞむ……トモダチ？」

「トモダチ……ああ、トモダチだよ……」

昨日会ったばかりで、親子どころか下手すれば祖父と孫ほどに年齢は離れていたが、とても良くしてくれた人だった。始めから、希望のことをただの子供と見くびらず、戦士として戦ってくれた熟練の老兵。その、呆気ない幕切れであった。

「……じゃあ、あたしもトモダチ」

光が、ガイラの近くに落ちていた大斧を拾い上げる。ガイラのものだ。

「光……？」

「トモダチだから、一緒にたたかう」

光はその斧を二、三度振って感触を確かめる。光の身長ほどもある大斧を、光は苦も無く振り回す。

「……いこ、のぞむ。おとうさんと、おかあさん、きつとまってる」

「……ああ」

もの言わぬ骸と化したガイラの、半開きのままの目と口を閉じさせ、少しでも安らかに、と祈りをささげる。そして、ごめんと謝罪する。

「僕は、逃げない」

逃げるなら、家族と一緒に。そのために、希望は走る。両親が戦っているであろう戦場に。有希が震えていたら抱きしめる、そのために。

そして、見た。

多くの魔族の死体。その中心で、一人明らかに巨大な雰囲気をつた魔族に。

——父親が、斬り倒される瞬間を。

「とう……さん？」

——母親が、血溜まりの中に沈んでいる現実を。

「ああ、さん……」

——妹が、苦しみに喘いでいる光景を。

「ゆ……きiiiiiiii!!」

走る。血溜まりに足を滑らし、魔族の死体に躓きながら。一心不乱に家族の下へ。

「む……子供か」

父を斬った魔族が何かを言っている。

「有希っ！ 有希しっかりして！」

有希の口からは、コヒュー、コヒューという空気漏れのような音がするだけ。

「英雄の子……後顧の憂いは絶っておくべきか」

魔族が手に持った豪華な剣を振り上げる。

「悪く思っ……」

「希望さまあっ！」

絶叫染みたシャインの声が遠くから聞こえる。光が大斧を担いで走る。でも、待ち合わない。

——斬っ——

「むっ！？」

「がっ……は……」

そこで漸く振り向いた希望は、魔族の剣を体で受け止めた、父の背中を見た。

「とう、さん？」

「風神……まだ動けたか」

聞き慣れない二つ名。しかし、それが父のものだと希望にはすぐに分かった。

「息子を……守れんでっ、何が……親だ……っ！」

「……そうか。ならば残念だ。……貴様は親ではなくなる」
「ぐあっ……」

ゴミを捨てるかのごとく、魔族は父を放り捨てる。

「父さん！」

「……………」

父は答えない。否、答える口は、もう既がない。

「……死んだか」

「う、ああああああああっ!？」

平坦に、確認作業をするかのごとく呟いた魔族。そして希望は、自分の中に力が入ってくるのを感じていた。

「!? む、まさか……この瞬間に継承されたのか！」
焦ったような魔族の声。

(関係ない……)

希望の周囲に風が渦を巻いている。

「おのれ……ぬかったか。だが、まだこの子供を切り捨てさえすれば……っ！」

「させない！」

「ちい！」

「希望さまから離れてください! 【ガイア・イーター】！」

光の斧による斬撃と、土石流を模した大地の奔流に、魔族は後退を余儀なくされる。

「幼子がぞろぞろと……ここは公園ではない！」

「知ったことか……っ！」

希望の、風を纏ったロットが魔族を襲う。魔族は余裕を持って躲す。

「貴様ら……この私に……魔王アスモデウスにガキの世話をしると言う気か！」

「魔王……っ!？」

「まおうって……」

「我が名はアスモデウス！ 魔界にその名を轟かす剣の王！ ガキ共が……命を捨てたくばかかって来い！」

「行つてやるさ……！」

こうして、希望たち三人対魔王。どうしても勝ち目のない戦いが始まった……。

第一部第五章「幸福の終わり・運命（フェイト）の足音」（後書き）

第五章でした。

……書いてから気がつきました。

これ、まんまテイ。ズじゃん！

せめてもの抵抗にどのタイトルかは言わないでおきます。技名もテイ。ズっぽいし……。

さて、それはさておき、そろそろ感想が欲しくなっただけで参りました。いや、第一話投稿した時点で欲しいのは当然なんですけど、一話や二話じゃ、まだ感想書けるほど作品見てねーよ！　ってのが当然だと思っただけで特に言っただけで済んでた。これで五話目。そろそろ何かリアクションあるとモチベーションも上がります。他の連載中の小説でもそうですが、感想が入ると思っている以上にモチベーション上がる。読者様とのコミュニケーションがとてつもなく励みになります。誤字の報告でもなんでもいいんだとするとすごく助かります。という要望。まあ、図々しいかもですが。お暇な方は是非。

それでは、悠でした！

第一部第六章「物語の序章」（前書き）

驚くことに前回まで主要キャラの年齢全部五歳。まああんまり幼くはみえないですが。

今回ようやく立派な大人のメインキャラが登場です。そして第一部クライマックス！ ではどうぞ。

第一部第六章「物語の序章」

アカシック

第一部第六章「物語の序章」

「飛翔戟！」

「ええいつ！」

「ちい！ 煩わしい！」

「【エレメンタルガンナー】！」

シャインから放たれる火、水、風、地、氷、雷。八色の弾丸を躲す。

「ちょこ……まかとお！」

魔王アスモデウスは、予想外の苦戦を強いられていた。

「ええい！ 間合いが掴めん！」

他の魔術が得意な魔王ならば少なくとも希望と光くらいなら瞬殺することができただろう。だが、類稀なる剣技で魔王としてのし上がったアスモデウスには、子供という極端に背が低く、柔軟に動く生物に対応するのが非常に難しかった。

「【バースト・ストライク】！」

「ぬあっ！？」

希望たちが避けたと思えばその間を突っ切ってくる爆炎を辛うじて躲す。

そう、これだ。これがアスモデウスが苦戦しているもう一つの原因。

「【バーン・スプラッシュ】！」

足下からの爆炎を斬り払う。

「このっ……！ 奴の魔力は無限かつ！？」

「【カラミティ・ブラスト】！【イビル・イーター】！」

アスモデウス目掛けて闇の砲撃と地を這う暴食の獣が解き放たれる。どちらも上級魔術。それを無詠唱で殆ど間を置かずに連射してくるシャインの、際限なしの魔力が恐ろしい。これほどの魔力量、魔術特化の魔王であってもあり得るかどうか。

アスモデウスが苦戦しているのは、ほぼシャイン一人の力によるところが大きかった。

——しかし、希望たちの善戦も、そう長くは続かない。

「きゃああっ！？」

まず最初に、光が吹き飛ばされた。いくらパワーと硬さがあっても、ただ真っ正直に突っ込んでくる上武器の扱いも素人な光では、アスモデウスの剣を受けきることは到底不可能だった。

「くっ……！」

希望はなんとか堪え切っている。元々ロッドという受け流すことに適性の高い武器を使っているし、希望自身も身軽で、何より先ほど突如使えるようになった風が膜のようになって希望を守っている。しかし、躲すことはできても受けることが出来ない希望では、シャインのカバーまでは手が回らない。

「きゃ……っ！」

「シャイン！」

辛うじてシャインを突き飛ばし、アスモデウスの凶剣から救う。

「ぐ……！」

その代わり、希望が足を斬られるという結果となってしまうたが。機動力の失われた希望では、アスモデウスの剣から逃げることで到底不可能。

「梃子摺らせてくれたな……」

「……………」

希望は眼を逸らさない。例え死んでも、心でだけは負けたくなかったから。

「終わりだ……！」

それでも、アスモデウスの殺気でほんの少し、後ろ手を引く。

ピクっ……。

「っ！」

ギインッ！

「ッ！ なに！？」

「く……う……！」

アスモデウスの剣は、希望が咄嗟に掲げた槍……血に濡れて、元の輝きなどどこにもないが、それは見なれた、年季の入った銀の槍

——父さん……っ！

「また、守ってくれた……！」

父は、二度も希望を守ったのだ。死して尚、その身を盾にして。

「はあぁっ！」

「くっ！？」

風の力も借りて、思い切りアスモデウスの剣を弾く。そこにシャインの魔術援護。

「あたしも……まだ！」

空気を切り裂いて飛ぶ大斧。光が渾身の力で投擲したガイラの斧は、アスモデウスといえど受け切れず、後退を余儀なくされる。

「……っ！ どこまでも粘る！」

「【ジオ】……！」

初級の治癒術が希望の足を癒す。元通りとは言わないが、動けないことはない。

「貴様らぁ……無意味な抵抗を続ける愚がわからんのか！？」

苛立ちが頂点に達したアスモデウスが怒鳴る。

「——どうやら、無意味というわけではなかったようだぞ?」

その声に……答える声があった。

「っ!? 何者だ!」

夕闇に染まる空の下。藍色の袴が翻る。腰に細身の大太刀を引っ提げたそのシルエットは、どこまでも気高く凜として。

「——よく、耐えた。大金星と言ってやろう」

闇夜すらも霞む深い漆黒の髪を一つに括り、同じ色の瞳が希望を射抜く。

綺麗な、あり得ない程の美貌を備えた女性だった。

「そして……貴様は黒星だ。残念だったな」

不敵な笑みが、どこまでも似合うその人は、魔王相手であろうとどこまでも不遜。

「貴様……まさか……」

「私の名を知っているか?……なるほど。そこそこに勤勉な魔王であつたらしい」

「月影……刹那!」

ふと、ニースヘッグの遺した言葉を思い出す。

『我が古き友、月影刹那に——』

——この人が……。

「真中の小僧は……嫁共々もう駄目か」

そしてその目が希望を捉える。

「ふん……息子はこちらまで粘ったというのに、だらしない小僧だ」言葉は冷たいが、その声音には悲しみが宿っていた。

それにしても、どう見ても二十代前半くらいの女性が父親を小僧呼ばわりしているのが不思議だった。

「さて……どう落とし前をつけてくれよう……」

「くっ……要注意リストの最右翼がいきなりお出ましとは……どう

やら、私は運が良かったらしい」

気迫に押され、冷汗すら掻いている魔王が、それでもニヤリと笑みを浮かべた。

「ほう……？ その心は？」

「この私が真つ先に……貴様を討ちとれるということだ！」

アスモデウスが剣を構えて刹那に迫る。対する刹那はまだその長い大太刀に手をかけてもいない。

「……雑魚が」

——斬ッッ！——

「な……っがああっ！？」

見えなかった。その動きが何一つ。希望には、刹那がただ突っ立っているようにしか見えなかった。それはアスモデウスも同じよう
で、斬られた痛みよりも異常な事態に対する恐怖の方が色濃い。

しかし、現に斬られたのだ。

「……不思議か？」

「っ！っ！」

真一文字に切り裂かれた胸から流れ出る血を抑えつつ、アスモデウスは刹那を睨む。

「それはな……貴様が弱過ぎるからだ」

「！な……っ！」

「ああ、勘違いするなよ？ 弱過ぎるから剣閃が見えなかったわけじゃない。私の一閃は見えて躲すことなどどんな達人にも不可能だ」

では、何故。そんな疑問が顔に出ていたらしく、刹那がしたり顔で解説する。

「貴様が弱過ぎるから、刀を抜く動作すら億劫だった。だから、『抜刀』・『斬撃』・『納刀』の過程を省略させて貰った。残るのは、『斬られた』という結果のみ」

「なっ……」

アスモデウスは驚愕した。そんな剣、一体どうやって躲すのか。
「何をそんなに愕然としているのだ？ もしかして、どうやって避

けるのか思案しているのか？……わからなければ貴様は所詮その程度だ。別にこの程度、躲すことなど容易い」

刹那はあっさりとそう言っただけ。こんな小技に驚くなと言わんばかりだ。

「……ふん。貴様はとつと何処へなりとも行っちゃえ」

クルリ、と刹那はアスモデウスに背中を向ける。あまりにも軽く敵に背を向けた。その堂々とした姿に、アスモデウスは自分が到底及ばぬ相手と理解したらしい。

「くっ……月影刹那……ここまでのものとは……」

「そもそも魔王程度が私に単騎で挑む時点で間違っている。私に刀を抜かせたくば、魔王大隊を千は連れてくるがいい」

刹那はそう言っただけ希望たちの方へと歩み寄る。最早アスモデウスに興味など皆無といった感じだった。

希望は今それどころではなく、苦しみ喘ぐ有希に必死で治癒術をかけているところだった。シャインは治癒術に向かず、光に至っては言わずもがな。今この場で治癒術が使えるのは希望のみ。

「有希……有希……！」

「……その娘。もう駄目だな」

「っ！」

キッ！と睨みつける。ギロリと睨み返されるが、一步も引かずに治癒術をかけ続ける。

「無駄だ。その程度の治癒力では苦しみを長引かせるのが関の山。穴のあいた風船、という言葉を知らんのか？」

「……」

それでも、希望は治癒術をかけ続ける。風前の灯でしかない妹の命を、少しでも長く繋ぎとめておくために。

しかし……。

「……ゆき？」

「……命、尽きたか」

その時、希望の中で何かが変わった。

の粒子と化し、希望の身体に吸い込まれていった。

「これで……ずっと一緒だ。有希……」

「希望……さま？」

「……………」

シャインが声をかけると、希望はゆっくりと立ち上がって振り向いた。

「……シャイン、怪我はないかい？」

「え……？ あ、はい。大きなものは……」

「そうか。なら、良かった。光、君は？」

「う、うん。あたしも、だいじょぶ……」

「貴様……」

希望の様子は超然としていた。元々大人びた少年であつたが、今の希望は更に大人びた……と言うよりも大人そのものの雰囲気を感じている。

希望は、悲しげに破壊された街を眺める。まるで、その光景を目に焼き付けようとするかのように。

「……真中希望」

その、齢五歳の少年とは思えぬ仕草と表情に、怪訝とした顔で声をかける刹那。

「なんでしょう」

「これから、どうするつもりだ？」

故郷は焼かれ、家族も失った。力はあっても、五歳の子供が生きていくのは困難を極めるだろう。

「……そのことですが、貴女にお願いがあります」

「聞こう」

「僕を……僕たちを弟子にしてくれませんか？」

「……なに？」

言葉では疑問形だが、刹那はその言葉を予測していたのだろう。言葉ほどは困惑していないようだった。

「貴女は強い。魔王を一顧だにしない程に」

「力を望むか。その理由は？」

復讐。故郷と家族を奪われた少年の生き方としては極わかりやすい、ある意味当然の心理。しかし……。

「復讐ではないことだけは、確かです」

その“当然”を、希望はあっさり、そして真っ先に否定した。

「いえ……ある意味では、復讐なのかもしれません。でも、それはあの魔王にじゃない」

あの魔王など、正直なところ刹那なら秒殺、いや文字通り瞬殺出来る。希望の目指すものはそんなものじゃない。

「運命……。この、理不尽に溢れた世界に」

ある日突然、何かが奪われ、絶望を押し付けてくる世界。

「不条理な世界は、嫌なんです」

「それが、世界というものだ」

「その世界の理を、破壊したいと思ったら？」

強く、強くなるしかない。誰よりも、何よりも。

「運命に操られる。そんな理不尽をいつか人間が乗り越えられるように。はねのけられるように。まずは、僕が強くなろうと思うんです」

だから、希望は力を望む。復讐をするためじゃない。むしろ、復讐をする者の出ない世界を作るために。

「不可能だ、と言ってやろうか？」

「知っています。そんな世界は、むしろ偽りだと」

人が人である限り、争いはなくならないし、魔族の脅威も変わらない。人そのものを変えてしまうことは、確かに世界に悲しみがない世界に繋がるかもしれない。けれど、今のままの人でなければ、意味がない。

「けど、今よりもっと、良い世界にしたい。誰もが望むそんな些細なことを積み重ねていく先に、優しい世界が待っています。なら……」

——僕は、そのための道標になりたいんです。

「……そのために、力を？」

「人を愛し、育み、導くために。僕は、力を望みます」

「お前は……何者だ？」

五歳の子供。そんな馬鹿な話もない。こんな考え方をする子供が、一体どこに居ようか。

「……………」

希望は答えない。

刹那はこの子供の未来を幻視した。聡明という言葉すら遙か後方に置き去りにしたような、この子供が、一体どのような成長を遂げるのか。そしていつか……。

「……いいだろう。ついてこい。ついでだ。貴様らも面倒見てやる」

豹変した希望を呆然と眺めていたシャインと光も、その言葉で我に返った。

「は、はい……」

「えと……はい……？」

二人は刹那と希望。両者の顔を見比べる。

「……大丈夫だよ」

ふわり、と二人の背中に希望の腕が回される。

「強くなるう。一緒に。もう、君たちまで失いたくはない」

「は、はい……」

「いっしょ……うん」

抱きしめられ、耳元で囁かれた優しい誓い。それを二人の少女は顔を赤くして受け入れた。

「……師匠」

「ん？」

「師匠と一緒に行く前に……この街の人たちを弔ってもいいでしょうか？ このまま置いておくのは、余りにも惨い」

「……そうだな」

さびしげに微笑んで、希望は息絶えた両親の下へと歩いて行く。

その背中に、刹那は声をかける。

「……すまなかったな。来るのが遅れて」

「……それが、理不尽な運命って奴なんですよ。僕は、それを認めたくなくて強くなるんです。だから、師匠じゃなくて、運命を、世界を怨みます」

「……そうか」

夜が明けて、また日が落ちるまでかけて、希望たちは住人の埋葬を完了した。

「……行くぞ」

「はい」

焼け焦げ、夕闇に沈む街を後にして、希望たちは故郷を去っていくのだった。

第一部第六章「物語の序章」（後書き）

はい。この小説における最強のチートキャラ、月影刹那さんの登場回でした。今回だけでも相当なバグキャラっぷりを見せてくれましたが、まだまだあんなものじゃありません。ジャンプ風に言えば、あれは月影刹那の真骨頂その一に過ぎません。真骨頂はまだまだあります。

感想はいつでもお待ちしております。
それでは、悠でした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3448/>

アカシック

2011年2月3日01時51分発行